

---

# 逆ハーっ子 が あらわれた！（仮） 番外編

片岡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

逆ハーっ子が あらわれた！（仮） 番外編

### 【Nコード】

N1867Y

### 【作者名】

片岡

### 【あらすじ】

『逆ハーっ子が あらわれた！（仮）』の番外編。

私たちがなんとなく思いついた話や、書きたかったけど載せられなかった話なんかを書いていきたいと思えます。

更新は不定期。思いついたら即載せます。

本多、素晴らしい人材を発見する（前書き）

本多が大和に付き纏うようになったきっかけのお話。

## 本多、素晴らしい人材を発見する

本多はその瞬間、雷をその身に受けたような衝撃を受けた。

ふらふらとした足取りで二、三步後退り、ついには崩れ落ち、廊下に座り込んでしまった。通行人たちはそんな本多を見て、迷惑そうな顔をしている。

だが、本多はそんなことに構ってられないほどの、ショックを受けていたのだ。

本多の目は、廊下に張り出された紙に釘付けになっている。そして、震える唇を開いた。

「ボール投げで俺の記録を越した男がいる……だと……!？」

本多が見ていた紙とは、体力テストの記録が載ったものである。

全校生徒が載っている、というわけでは勿論無く、各種目毎に素晴らしい記録　つまるところ最も優秀な記録　を打ち出した生徒の名とその記録が記されているのだ。

三年、二年はあまり知らぬ名、もしくは野球関連でよく知っている名がある。そして、一年の記録は一人の男が独占していた。

この間、行われた体力テスト。そのテストの中の一項目であるボール投げ。そのテストで本多は自己ベストを越す記録を出し、その記録に絶大なる自信を持っていた。よもやこの記録を越せる者などいないだろう、と。

だが、その自信が呆気なく崩されるなど、いったい誰が思っただろうか。少なくとも、本多は思わなかった。

本多は酷く自尊心を傷付けられていた。そして同時に、三つの頃から野球だけをしてきた自分の記録を抜いたその男に、興味を持っていた。

さぞかし名のあるスポーツマンなのだろう。野球では聞いたことがない。それなら、別のスポーツか。

しかし、そんなことは関係ない。なんとしてでも引き抜き、我が野球部に転部させてみせる。

「待っている、広崎 大和……！ふははははっ！！」

突如高笑いし始めた本多を、通行人たちは不気味そうな目で見ていた。

「広崎 大和はいるか！！」

迷惑なことに教室の出入り口のと真ん中に仁王立ちし、自分の名を大声で呼ぶ坊主頭。大和は思わず昼食の焼きそばを詰まらせた。ぐ、と呻いた大和の背と一緒に昼食をとっていた友人が擦っぺくられた。ありがとうと礼を言って、大和は坊主頭のもとへ向かった。

「……俺が広崎 大和だけど、何か用か？」  
「ほお……、お前が広崎 大和か。俺は本多 高志だ」  
たかし

自棄に自分の身体つきをじろじろと見てくる本多。大和はなんだか居心地が悪かった。

そして、本多は単にスポーツマンとしての大和の筋肉の付きかたを観察していただけなのだが、ちよつとした誤解をした人間も少なくはなかった。

「広崎 大和！俺と共に昼食を食え！」

「……？ なんで？」

この瞬間、誤解をした人間の中の小さな疑念が、確信へと変わった。

「広崎！行かねーほうが良いって！危ねーよこいつ！！」

「大和くん！こいつなんかよりも私たちとご飯食べようよ！」

「う……うん……？」

「つーか、待て待て！大和は俺らと一緒に食ってたんだって！」

「な、なんだお前たち！邪魔をするな！！」

本多の叫びも空しく、遂には教室の外へ追い出されてしまった。ドアには勿論鍵がかけられていた。

懲りずにまた大和のもとへやってきた本多が、何時の間にもやら結託したクラスメイトたちとの間で静かな、されど激しい戦いが繰り広げられるのは、また別のお話……。

**本多、素晴らしい人材を発見する（後書き）**

大和はきつとクラスの人気者。

淡い恋心が引き起こした悲劇（前書き）

うっかり「あんこが食べたい」と言ってしまった小百合に起きてしまった悲劇。

## 淡い恋心が引き起こした悲劇

四時間目の授業終了を知らせる鐘がなる。

早速昼食をとろうと弁当を取り出した小百合のもとに、男共が弁当と机を持ってやってくる。いつものことだ、と小百合は笑顔で迎えた。

小百合の周りに集<sup>たか</sup>ってきた男共の中の一人が、不意にこんなことを言った。

「小百合ちゃんって、どんな食べ物が好き？」

「食べ物？」

小百合はきよんととして、考えた。好きな食べ物、余り考えたことがなかった。

“前”のときはそんなことを気にしている余裕は無かったし、今は好き嫌いではなく、栄養豊富で美容に良いものを選んで食べている。

悩み始めてしまった小百合を見て、今度は違う男が言った。

「あ、好きな食べ物じゃなくてもさ！なんか……、今食べてえもんとか無いか？俺、買ってきてやるよ！」

その言葉に、周りの男共が目を光らせた。そうか、それが狙いか、と小百合は何故突然あんなことを訊かれたかがわかった。

言ってしまうえば、男共は小百合に貢いで好感度を上げてしまおうと思っっているのだ。決して鈍いわけではない小百合はすぐにその意図に気が付いた。

「うーん、今、食べたいもの……」

考え込む小百合の思考に、ある一人の男が割り込んだ。最近は何か考え事をしてしていると、すぐにあの人のことを考えてしまう。

だが、それは決して不快というわけではなかった。寧ろ、心地が良い。

初めて知った恋というものに小百合は酔い痴れていた。

そして、はたと思いだす。

そういえば、大和の好きな食べ物は何菓子だったはず。何故か購買にジャムやら餡やらが大量に置いてあったのを見たことがある小百合は、呟いてしまった。

「あんこが、食べたいなあ……」

大好きなあの人、大好きな和菓子のうちである餡。

少しでも、大和と同じものを共有出来たら。小百合はそんな可愛らしい乙女心から、自然にそうこぼしていた。

そして、そんな小百合の恋心が後に悲劇を起こすことになるかと

は、そして、大和の好感度を下げてしまうことになることは、このとき小百合は思いもしなかったのである。

淡い恋心が引き起こした悲劇（後書き）

私の書く小百合は阿呆だった。

この後大量に餡を持ってこられた小百合は困惑します。

プリン事件〜愛しの君は今いずこ〜（前書き）

タイトルは適当なので気にしないで下さい。

12話にちよつと出てきた話題の番外編。冒頭の文は13話から。

ちよつと疲れたから三人称じゃなくて一人称で行きます。

シリアス調なのは仕様。

## プリン事件く愛しの君は今いずこ

大和は横目で美穂の手元を見ながらボウルの中身を混ぜる。こいつは相変わらず本当に不器用な奴だ、と思った。

そういえば、とふと思い出す。

前に一度、美穂とプリンを作ったことがあった。

あのときはまだ俺たちは少し子供で、何が正しくて、何が間違っていたかなんて、わかりもしなかった。

だから、だからあんな間違いが起こってしまった。

大人たちは誰も悪くないと言って、笑い、誤魔化した。誰もがその言葉に納得した。当事者であった、美穂でさえも。

だけど、俺はそうは思えなかった。

仮に美穂は悪くなかったとして、それでもやっぱり、俺だけは罰されるべきであったのだと思う。

たった一つの、かけがえのない命を奪う、その一因となってしまう、罪深い俺だけは。

七年前、ある暑い、夏休みのことだった。

俺たちの歳の頃は一年を十回重ねただけの齢で、それでも二人きりの留守を任されるには十分な歳だった。

俺は遊びに来た美穂と暫くトランプなどの部屋遊びで遊んでいたが、唐突に飽きてしまった。

何か面白い遊びは無いかと思案する俺の頭に、名案だと思われるものが浮かんだ。

だが、それが間違いだったのだろう。

「美穂！一緒にお菓子を作ろう！」

「お菓子？うんっ！作る！」

提案すると、美穂は目をきらきらと輝かせて賛成した。

聞くと、菓子を作るのは好きだが、危ないからと母親に禁止されていたらしい。

その言葉の真意に気づくことが出来ていたならば、悔やんでも、悔やみきれない。

話し合った結果、子供たちだけということもあり、簡単に作れるプリンにした。多少火を使う工程もあるが、俺は料理が得意だということもあり、母親からは容認されていた。

カラメルソースを作り、プリンの本体を作り、蒸し焼きにする。

美穂は待ちきれないようでそわそわしながら、キッチンとリビングを行ったり来たりしていた。

二つのプリンが入ったカップを見て、そろそろ頃合いだろう、とプリンを取り出す。

パツと顔を輝かせた美穂が駆け足で近寄ってきた。

「出来たの!？」

「うん、出来た。あとはカップから取り出すだけだ」

そう言いながら食器棚から小ぶりな皿を二つ取り出し、一枚と飾り付けのさくらんぼを美穂に手渡した。

視線を自分のぶんのプリンに戻し、皿を開けた。プルンとその滑らかな美しい身体をくねらせ、プリンが姿を現した。

カラメルソースもちゃんとしているし、美味しそうだ。俺はさくらんぼを中心に落とした。

出来栄えに一人満足していると、びちゃあ、という不可解な音と、浅い水溜りの中に何かを落としたような音。

俺は音の発信源を見た。

「あ、ああっ……!!」

悲鳴のような、声が漏れた。

美穂は震え、泣きそうな顔でプリンになるべきだったものを見ている。言い知れぬ焦燥に襲われ、思わず呼吸が乱れる。

「ぶ、プリン……」

美穂が涙にぬれた声で、ただそれだけを吐き出した。

なんで、どうして、どうしてこんなことになってしまったんだ。

俺は涙で揺らぐ視界を閉じて、必死に考えた。

なんで、なんでなんでなんでなんで！！

ああ、痛い、どうして、なんで。俺たちがいつたい何をしたというのか。いや、悪いのは、俺か……？

狭く、不透明な黄色い海に浮かんださくらんぼが、目に焼き付いて離れない。

思わず思い出されたやるせない気持ちを首を振って追い出す。  
やめろ、忘れる。いいや、忘れちゃいけない。悲しみもとっておいて、捨ててよ、違う、駄目、傷も残すの。癒して、駄目だよ。だって、

「赦されて、ない」

何か、大事なものを失ったときの、あの虚無感に似ていた。

彼女プリン（彼でも可）を殺めてしまったときに感じたのは、まさしくそれだった。

そう、そうだ。きっと、大事だったんだ。大切だったんだ。彼女は、俺の大切な。

責めるように、哀しむように俺を見上げていたあの赤は、今でも

鮮明に、まるで昨日のことのように思い出せた。

プリン事件、愛しの君は今いずこ（後書き）

大和はきつとお菓子に命懸けてる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1867y/>

---

逆ハーっ子が あらわれた！（仮） 番外編

2011年11月5日17時05分発行